青年の「甘え」の背景に関する調査研究Ⅱ

篠　原　しのぶ・原　崎　聖　子

A Study of the Background of "Amae" II

Shinobu Shinohara・Seiko Harasaki

キーワード：甘え、経済観念、愛他行動、親の養育　価値観　欠席願望

【はじめに】

われわれは、1996年以来、いろいろな角度から「甘え」の分析を行ってきた。しかも、日本人に特有な心理状態であるといわれる「甘え」について、性格的なものという観点からではなく、行動面から分析することにより、社会生活を送る中でより良い人間関係を保ちつつ、家族・近隣・学校・職場等の社会に適応していくための指導・教育に役立つ資料を提供する可能性を探るという方向で検討してきた。そのために、「甘え」を起こさせる背景について多角的に分析を重ねてきたのである。

今回は従来からの研究に加えて、大学生女子の就学意欲とのかかわりをも検討していきたいと思う。

従来から登校拒否、怠学、学校恐怖症等と言われていたものを含めて最近は「不登校」と呼んでいるようである。義務教育機関である小・中学校の児童・生徒の不登校傾向が近年増加し、いろいろな場面で大きな課題となっている。総務庁の調査によれば、特別の理由なく年間30日以上欠席する者の数（いわゆる不登校者数）は、1991年に、小学生12,465人（0.14%）、中学生54,172人（1.04%）であったものが、1997年には、小学生20,765人（0.26%）、中学生84,701人（1.89%）と増加している。非常に驚くべき数値ではある。

世界的に見て就学率が非常に高いといわれる日本において、特にはっきりした理由もなく長期間学校に行かないということは、その子どもをはじめとして、その子を取り巻く周りの状況に何らかの原因があると考えられることが多く、不登校問題を取り上げた研究の多くは、欠席児童・生徒に焦点を当てたものがほとんどであった。現在、そのような児童・生徒の心のケアをするために、臨床心理士の方々が、非常に活躍しておられることにより、少しでも不登校者を減少させることに貢献しておられることも事実である。

2003年の文部科学省学校基本調査によれば、全国平均で見た場合、小学校児童はおよそ１学年に一人、中学生ではおよそ１学級に一人が不登校者であるという。しかし見方を変えれば、それ以外の児童・生徒たちは、仮に学校を休みたいと思うことがある場合でも、すなわち多少の欠席願望を持っていても、健気にも登校しているということになる。われわれはこのように、欠席願望を抱きながらも登校している多くのものたちに光を当てて研究を進めていきたいと思う。

最近の小・中学校における児童・生徒たちの登校意欲あるいは登校忌避傾向はどのようなものであろうか。

東京都内のある公立中学校での2003年度の調査によれば、「中学校でいじめを受けた経験がある」と回答した生徒が90%いるのに対して、「仲良しの友達が学校にいる」98%、「学校に来るのが楽しい」89%、「勉強がわからないとき相談相手がいる」83%、「困ったときに相談する相手がいる」79%、という回答結果になっている。いじめの質や激しさにもよるであろうが、この結果からは、仮にいじめられたときにも、仲良しの友人仲間や、相談仲間に救われながら、つらいはずの学校生活をむしろ楽しんで登校しているのではないかという解釈が出来るであろう。その一方で、学校に来るのが楽しく、相談相手もおり、仲良しの友達もいる生徒が多い中で、数は少ないがそういう気持ちをもてないでいる生徒がいることも事実であり、無視できない現状があると言える。

これまでの研究で、日本の大学生は、米国・中国の大学生と比較して、「受容・承認を求める甘え」と並んで「非自立の甘え」因子の得点が著しく高く、「甘え」を総合的に見ても他国より高いということが明らかになっている（篠原・原崎2000、2002、2003）。不登校との間に何らかの関係はないであろうか。

ところでわれわれが大きく関与している大学においても、似たような状態を見ることが出来るといえる。しかも、義務教育である小・中学校と違って、大学生の場合は不登校者はそのまま退学予備軍になるとも考えられるのである。

大学生が抱く欠席願望とは一体どのようなものであろうか。もしそれらがある程度はっきりするならば、それを出来る限り減少させ、代わりに、欠席願望を抑制する要因の増強を諮ることも出来るのではないであろうか。そして更に、もっと積極的に登校意欲を促進させる要因

を見出す方向に導いていくことにつなげることが出来るのではないかと考える。

そこで今回は、大学生女子の「甘え」を中心にして、その背景であると思われる「経済観念」「幼少時の親子関係」「愛他行動」その他学生の生活意識等を多角的に調査し、欠席願望をいかにして抑制することが出来るかということとのかかわりを明らかにしていきたいという目的で、本研究を企画実施し、分析を行った。

【調査手続き】

調査対象者

福岡市内在住の大学生女子	292名

調査内容

甘え６因子各５項目	30項目
経済観念	25項目
愛他行動	21項目
幼少時の親の養育態度	14項目
生活意識	25項目
欠席願望理由	12項目
欠席願望抑制要因	13項目
日本人的生き方	３項目

調査時期

平成16年６月

調査方法

各授業教室において集団調査

【結果と考察】

１．経済観念と「甘え」との関係

まず、経済観念の各項目に対する回答を高得点順に示すと次の通りである。１．借りたお金はきっちり返す（4.46）、２．もっと自分で稼ぎたい（4.23）、３．習い事や運転免許にかかる費用は親が出してくれる（3.83）、社会人になったら一人暮らしをしたい（3.83）、５．家庭の経済状態を理解している（3.80）の順であり、逆に、低得点順では、１．社会人になっても金銭的に困ったときは親を頼る(2.63)、友人らに食事などをおごる(2.63)、３．学生の間は親のすねをかじりたい（2.96）、４．ブランド物に興味がある（2.99）、５．お金のやりくりは慣れている（3.00）となっている。この結果は、2003年の結果とほぼ同様である。

そこで、経済観念と「甘え」との関係を今一度見ていきたいと思う。

今回は以前実施した経済観念に関する質問項目40問を因子分析した結果を用いた（篠原・原崎2002）。その因子は次のとおりである。１．「お金がなくなったら親に頼る」「友人との旅行の費用等は親が出してくれる」等を含む『すねかじりの因子』（７項目）、２．「無駄遣いしないように気をつけている」「買うものをあらかじめ考えてから買う」等を含む『計画的使用の因子』（６項目）、３．「気に入ったものは高くても買う」「お金を使うことが好きだ」等を含む『浪費の因子』（３項目）、４．「バス等を使わず徒歩・自転車で用事を済ます」「今月はあといくらで暮らすと考えることがある」等を含む『質素・倹約因子』（４項目）、５．「社会人になったら一人暮らしをしたい」「もっと自分で稼ぎたい」等を含む『自立志願因子』（３項目）、６．「貯金をしている」「お金のやりくりには慣れている」を含む『貯蓄志向因子』（２項目）の６因子25項目である。

この各因子を甘え得点の高群と低群とに分けて、各因子得点を見ていく。両群間に有意な差が見出されたもののみを示したものが表１である。

「すねかじりの因子」「浪費の因子」はいずれの甘え得点も高群のほうが有意に高得点を示している。頷ける結果であると思われる。

「計画的使用の因子」「質素・倹約の因子」「貯蓄志向の因子」等においては、逆に、甘え低群のほうが高得点を示している。因子を構成している項目から、このように、甘えが低いことが経済観念によい関係をもたらしているということは、今後の指導にも大きな影響を与えてくれるものと思われる。

以上の通り、大学生女子の経済観念は、各種甘え得点と大きなかかわりを持っていることが明らかとなった。

２．生活意識と「甘え」との関係

① 生活意識の現状

生活意識で高得点をマークした項目を高順に、また、低得点をマークした項目を低順に示してみよう。得点が高かったものは「女性は喫煙しないが良い（4.00）」「礼儀を守るよう親から厳しく言われた（3.97）」「親は決まりを守るよう厳しく言っていた（3.93）」「親と話すのが

表１．甘え因子と経済観念因子との関係

甘えの因子	引っ込み思案		受容承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
人　数	146	141	141	146	134	153	170	115	129	157	142	144
すねかじり	高＞低*		高＞低**						高＞低**		高＞低**	
計画的使用	高＜低*						高＜低**		高＜低*			
浪費			高＞低*		高＞低*							
質素・倹約					高＜低*				高＜低*			
自立志願	高＜低**										高＞低*	
貯蓄志向			高＜低＋						高＜低**			

楽しかった（3.83)」の順であった。親から厳格に教育されておりかつ、親との親和性が見られるようである。

これに反して低得点順に見てみると、「男性のほうが職務に忠実である（2.91)」「男性のほうが決断力がある（2.92)」「男性のほうが度胸がある（2.94)」等が低得点を示している。男性に対する不信感と捉えてよいのであろうかそれとも女性と比較することを拒んでいるのであろうか。

② 生活意識と「甘え」との関係

前回は、生活意識の各項目ごとにその得点の比較を行った。今回は生活意識を因子分析した結果（篠原・原崎2001）の各因子ごとに、「甘え」得点を高群、低群に分けて検討を加えた。その因子は次のとおりである。

1.「女性のほうがこまやかな心遣いができる」「女性のほうが身の回りの世話が良くできる」等を含む『伝統的女性性重視因子（4項目)』、2.「男性のほうが決断力がある」「男性のほうが社会的視野が広い」等を含む『伝統的男性性重視因子（7項目)』、3.「自分の考えはしっかり主張する」「自分の考えに基づいて判断する」等を含む『自己責任性因子（4項目)』、4.「親は私の話をよく聴いてくれた」「いろいろな時に親は慰めてくれた」等を含む『親との親和性因子（6項目)』、そして、6.「礼儀を守るよう親から厳しく言われていた」「親は決まりを守るよう厳しく注意していた」等を含む『親の厳格性因子（4項目)』の6因子である。検定の結果有意差が見出されたもののみを示したものが表2である。

表から明らかなとおり、有意性の見られたものはいずれも「甘え」低群が高得点を示していることがわかる。

伝統的男性性重視に対する得点は前述のとおり軒並み低いのであるが、これらは全て「甘え」の高低に全く関係なく、伝統的男性性を認めていないといえる。これに対して、伝統的女性性重視のほうはいずれの項目もかなりの高得点を示しているのであるが、中でも責任回避の甘えの低いものは高いものに比して、有意に高得点を示している。大学生女子の中で責任回避の甘えが少ないものが伝統的女性性を重視していると言うことは、責任を持って伝統的女性性を守り続けていこうと言う気持ちにも繋がる可能性があるということが言えるであろう。

自己責任性はいずれの甘えにおいても、甘え低群が高群に大きな差をつけて高得点を示している。「自らの責任で行動したり」「自分の考えに基づいて行動」できる者たちが、甘えの低い者たちであるということは至極当然のことであると考えられる。

「親との親和性」においては、「責任回避の甘え」と「非自立の甘え」の低群が「親との親和性が高いという言う結果が出ている。責任回避が少なく、かなり自立した生き方をしているものが親との親和性を高く評価しているということもできようが、「親からよく話しを聴いてもらい」「慰めてもらい」「親と話すのが楽しく」感じられ「喜んで親の手伝いをして」育った青年たちが、責任回避をすることがあまりなく、自立した生き方をするように育ってきたと考えることもできる。即ち両親との幼少時からの良い関わりが甘えを少なくする力を持っているといえよう。

更に、親の厳格性との関係を見てみると、「引っ込み思案の甘え」と「屈折した甘え」との間に関係が見出されている。引っ込み思案の甘えが少なく屈折した甘えが低いものが、親の厳格性を高く評価しているのである。つまり、親の厳格な養育を受けて育った青年たちが「引っ込み思案の甘え」や「屈折した甘え」を低めることに役立っているといえる。

以上に点を重ね合わせて考えると、親が親身に受容的養育態度で子育てをし、且つ、厳格な指導をすることが、好ましくない甘えを低減することに役立っているといえるであろう。

3．愛他性と「甘え」との関係

① 女子大学生の愛他性の実態

大学生の愛他性の現状を高得点順と低得点順に示したものが図3である。得点が高かったものは1.「友人が喜んでいるときに共に喜べる（4.05)」2.「皆と協力することができる（3.90)」3.「助けを求められたら気軽に手を貸す（3.88)」4.「悩んでいる人の力になってあげる（3.84)」等であった。喜ぶものと共に喜び、多くの人と協力することのできるやさしさが感じられる。

他方、低得点であったものは1.「ボランティア活動をよくする（2.51)」2.「宗教的雰囲気を大切にする（2.56)」3.「自分の好意を無にされても気にならない（2.57)」4.「進んで障害者と近づきになる（2.72)」等である。阪神淡路大震災以来、かなりボランティアに

表2．甘え因子と生活意識因子との関係

甘えの因子名	引っ込み思案		受容・承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
人　数	146	141	141	146	131	154	167	116	127	157	142	143
伝統的女性性							高＜低**					
伝統的男性性												
自己責任性	高＜低***						高＜低***		高＜低***		高＜低***	
親との親和性							高＜低**		高＜低＋			
親の厳格性	高＜低＋				高＜低**							

表３．甘え因子と愛他性因子との関係

甘えの因子名	引っ込み思案		受容・承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
人　　数	147	143	142	148	134	156	171	117	130	159	144	145
協調的愛他性	高＜低***		高＞低*		高＜低**		高＜低***		高＜低**			
積極的愛他性	高＜低＋				高＜低*		高＜低*		高＜低*			
許容的愛他性					高＜低*							

対する意識が強くなっていると思われていたが、今回又最低得点となっている。学生たちの気持ちとしては、やりたいが、どこで何をしたら良いかわからない、あるいは、やりたいけれど学校が忙しくてその暇がないといういわばいいわけ的な気持ちを持っており、決して無関心であるわけではないであろうと善意に解釈することもできよう。しかしこれに負けず劣らず宗教的雰囲気を大切にすることも少ないという結果が出ている。

② 愛他性と「甘え」との関係

愛他性に関する項目21項目を、主因子法、バリマックス回転により因子分析し、固有値1.0以上を持って因子数を決定したものを参考に（原崎・篠原2004）、愛他性３因子と「甘え」の関係を見たものを表３に示す。尚、愛他性の因子は次のとおりである。１．「誰とでもすぐ仲直りする」「皆と協力することができる」等を含む『協調的愛他性因子（５項目）』、２．「ボランティア活動をよくする」「進んで障害者と近づきになる」等を含む『積極的愛他性因子（５項目）』、そして３．「約束を破られてもすぐその人と又約束をする」「他人に害を与えられてもそれを許す」等を含む『許容的愛他性因子（４項目）』の３因子である。

ここで先ず言えることは、「追従の甘え」はいずれの愛他性とも関連がないということである。次に「受容・承認を求める甘え」のみ、甘えが高いほうが協調的愛他性得点が高くなって出ている。自らが「かまってほしい」「受け入れてほしい」「寂しがりやである」等の甘えを強く抱いているものたちであるために、誰とでも仲直りしよう、仲良くしよう、協力しようという気持ちを強く持ち、ひいては寂しい気持ちを癒すことにつなげて行こうとしていると考えることができるのではないであろうか。従来から我々の「甘え」研究の中で、この「受容・承認を求める甘え」は他の甘え因子と異なる結果を表してきていた（篠原・原崎1999、2000、2002、2003）が、今回も協調的愛他性を高めるという他の甘えとは異なった方向性を示しているのである。

更にこの「協調的愛他性」「積極的愛他性」はいずれも甘えの高低と大きな関係があることがわかる。更に、「積極的愛他性」は中国の大学生女子と比較したとき、0.1%水準の有意性をもって日本の女子学生のほうが低いという結果を得ている（原崎・篠原2004）が、今回もほぼ同程度であり、他の愛他性よりも低くなっている。他の人たちと協調しあったり、他者を許したり、受け入れたりすることはかなり容易にできる女子学生たちであるが、積極的愛他性が今回も低かった。自らはじっとしていて協調したり許容したりすることはできても、宗教的雰囲気を大切にするという項目も含め、自らが積極的にボランティア活動をしたり、老人を敬ったりすることが苦手であることが伺える。今回被調査者になった女子学生だけでなく、現在の日本青年の多くは、このような気持ちが薄れていることが確かであろう。しかし、この項目の得点が低い中でも、甘え得点の低群に属する者たちの積極的愛他性得点が高いということは救いであろう。積極的愛他行動に出ることによって甘えを低くしていくことが出来るとも考えられる。

４．大学生女子の欠席願望理由と「甘え」との関係

① 欠席願望理由の現状

大学生女子はどのような理由で大学を欠席したいと思うのであろうか。前述のとおり、義務教育である小・中学校の児童生徒と違って、大学生の場合、不登校を続けるものはそのまま退学予備軍となると考えられる。大学生が抱く欠席願望がある程度はっきりするならば、それをできる限り減少させ、代わりに欠席願望を抑制する要因の増強を諮ることもできるのではないであろうか。そして更に、もっと積極的に、登校意欲を促進させる要因を見出す方向に指導していくことにつなげることができるのではないかと考える。

先ず、高得点順と低得点順に項目を挙げると、図４のとおりである。得点が高かったものは、１．朝から疲れているとき（3.88）、２．嫌いな授業があるとき（3.59）、３．体調が優れないとき（3.43）、４．他にやりたいことがあるとき（3.33）等の４項目が3.0を超えた項目であった。逆に低得点であった項目は、１．話し合える友人がいない（1.97）、２．教員との人間関係がうまくいかない（2.19）、３．友人との人間関係がうまくいかない（2.40）なっていることがわかる。

先行研究者の一人である本間（2000）によれば、中学生の欠席願望は主として身体・気分要因に基づくものが多いと言っている。また、安永（2004未刊）の調査結果においても、小・中・高校生は共に、気分・体調による登校忌避傾向が高いという結果を認めている。したがって大学生の欠席願望理由もほぼ同様の理由であるが、平均点が4.0未満でありそれほど強くはないことが明らかである。これに対して、友人や教員との人間関係がうまくいかないという理由での欠席願望の平均値が小さいということは、大学生になると人間関係に影響されて、即

表4．甘え因子と欠席願望理由との関係

甘えの因子名	引っ込み思案		受容・承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
人　　数	147	141	142	146	134	154	167	116	127	157	142	143
身体・気分			高＞低＋				高＞低＋		高＞低＋			
学校不満			高＞低**		高＞低**		高＞低**		高＞低*		高＞低*	
人間関係不満	高＜低***				高＞低*		高＞低**		高＞低*		高＞低***	
学外誘惑			高＞低*		高＞低**		高＞低***		高＞低**		高＞低**	

ち人間関係がネックになって欠席を願望する者のはごく少数であるということがわかる。

② 欠席願望理由と「甘え」との関係

「朝から疲れている」「体調がすぐれない」等を『身体・気分要因』、「嫌いな授業がある」「嫌いな教員と会わねばならない」等を『学校不満要因』、「友人との人間関係がうまくいかない」「教員との人間関係がうまくいかない」等を『人間関係不満要因』、「他に出かけたいところがある」「友人に誘われた」等を『学校外誘引』と命名し、これら各要因と「甘え」の6因子との関係を見てみよう。

甘え6因子をそれぞれ高群と低群とに分け、欠席願望理由の得点を比較した。有意差が見出されたもののみを示したものが表4である。この表から明らかなように、「甘え」との関係が非常に大きいのであるが、そのいずれも「甘え」得点の高群のほうが欠席願望が高いということがわかる。中でも、「屈折した甘え」と「非自立の甘え」の因子は、いずれの欠席願望も高くなっている。すぐ不機嫌になる、いらいらするや、弱音を吐くことがある、逃げ腰になる等が含まれている両因子であるため、欠席願望が強いということは充分うなづける。

また、人間関係不満要因は、前述のとおり欠席願望としては非常に少ないのであるが、その中で、「引っ込み思案の甘え」の高いものたちは、この理由で欠席を願望することが強くなっている。引っ込み思案の甘えが強い者は、人間関係がうまくいくことが非常に重要な要因になっていることがわかる。

以上のとおり、欠席したいという願望は、甘えとの関係が非常に強いということができる。

5．欠席願望抑制要因と甘えとの関係

① 大学生の欠席願望抑制要因の現状

学生たちは何らかの理由で大なり小なり欠席願望を持っていることがわかった。しかしそれでもなお、登校して受講しているのはどのような理由によるものであろうか。得点の高いものから順に示してみると、1．「自分で決めたことだから（4.17）」2．「自分の将来に役立つと思うから（4.15）」3．「出席することが当然だと思うから（4.11）」4．「親に授業料を出してもらっているから（3.96）」となっている（図5参照）。大学生は、在学している大学が第一志望校であったか否かに関わらず、また、複数の大学に合格していたにもかかわらず最終的には自らが決めたという自覚を持っていることがわかる。更に、自分の将来に役立つと思って登校し受講しているという学生が多いという結果は、非常に喜ばしいことであるといえよう。

これらに比べて、「なんとなく（3.01）」「親や家族が大学に行くように進めるから（2.75）」「親に叱られるから（2.28）」等はかなり得点が低く、大学生の自律心が伺える。ただ、「なんとなく」登校している大学生がかなりいるということに注目する必要があるであろう。このような学生の気持ちを重大に受け止めて指導の工夫をすることが必要であると思われる（図5参照）。

② 欠席願望抑制要因と甘えとの関係

自分の将来に役立つと思うからや、自分で決めたことだから等を含む項目を『自己基準要因』、親や家族が行くように進めるからや、親に叱られるから等を含むものを『親圧力要因』、なんとなくや、大学にいくことが習慣になっているから等を含む項目を『習慣要因』、そして、大学が楽しいからや、大学の授業が面白いから等を含むものを『学校魅力要因』と命名し、これらと「甘え」との関係を見た。この場合も甘え得点を高群と低群に分けて、それぞれの要因の得点を比較した。その結果有意差が検出されたもののみを示したものが表5である。

表から明らかなように、なんとなく習慣で登校しているという『習慣要因』は、「甘え」との関係が全く見出されていない。これに対して、『親圧力要因』によるものは、いずれの「甘え」の場合も高群のほうが高くなっ

表5．甘え因子と欠席抑制要因との関係

甘えの因子名	引っ込み思案		受容・承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
人　　数	145	141	140	146	131	154	167	116	127	157	142	143
自己基準	高＜低***				高＜低＋		高＜低**		高＜低**			
親からの圧力			高＞低＋		高＞低＋		高＞低**		高＞低**		高＞低**	
習慣												
学校魅力	高＜低**				高＜低＋		高＜低＋		高＜低*			

ている。やはり大学生といえども「甘え」の強い者は、親や家族からの後押しを得て登校している様子が伺える。一方、『自己基準要因』によるものは、何れの甘えも低群が高得点を示している。自己基準をしっかり持っているものは「甘え」が少ないということである。又「甘え」得点が低い者たちは、学校に対する魅力を感じて登校しているといえよう。

以上見てきたとおり、欠席願望理由に関しても、欠席願望抑制要因に関しても、「甘え」との関連が非常に深いということが明らかとなった。

6．幼少時の親子関係と「甘え」との関係

① 大学生幼少期の親の養育態度の実態

大学生の幼少期の親子関係はどのようなものであったであろうか。ここでも高得点項目と低得点項目を図6に示してその実態を検討してみたい。高得点を示したものは1.「幼少時は食事時に家族全員が集まっていた(4.28)」2.「幼少時に両親から大切に育てられた(4.20)」3.「子育ての中心は母親であった(3.94)」4.「寝るときに本を読んだり話しをしてもらったりした(3.90)」等であった。昭和から平成への移行期であると思われるが、家族そろって食事をし、両親から大切に育てられた大変平和な家庭生活が眼に浮かぶようである。

一方、低得点を示した項目は1.「幼少時から自分ひとりの部屋で寝ていた(1.83)」2.「子育ての中心は父親であった(2.38)」3.「小さいときからお父さんのようになりたいと思っていた(2.54)」4.「小さいときから男らしく、女らしくするように言われていた(2.78)」となっている。日本の住宅事情にもよるであろうが、親と共に就寝するという伝統的慣習がここでも受け止められるし、これも両親から大切に育ててもらったという印象を子ども達に持たせたのかもしれない。ただ「子育ての中心が父親である」という回答が低い上に、「小さいときから父親のようになりたいと思っていた」ものも少ない。時代の影響もあろうが、父親の影響の薄さが気になるところである。

② 幼少時の親の養育態度と「甘え」との関係

次に各項目を甘えの高群と低群に分けて比較してみる。両群に有意差が見出されたもののみを示したものが表6である。主なものについて検討してみる。

i 「幼少時は食事時に家族全員が集まっていた」という項目は、最も高得点を示している項目であるが、「甘え」との関係は全く見出されていない。今回の被験者の幼少時というのは昭和から平成への移行期の頃であったと思われるが、甘えの高低とは無関係にほとんどの家庭が夕食を共にしていたということがわかる。また、「幼少時の子育ての中心は母親であった」という項目も、甘えの高低とは無関係にかなりの高得点を挙げている。この2項目から、家族全員で夕食の食卓を囲み、母親中心で子育てをしていたということがごく自然の状態であったと思われるし、日本の伝統的家族の風景が見えてくる。

ii 「幼少時から自分でできることは自分でするように言われて育った」という者達は、「引っ込み思案の甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」の低得点群の方が有意に高い得点を挙げている。自分でするようにという親の養育態度がこの種の甘えを減じるのに大きく影響を及ぼしていると言える。

iii 逆に「引っ込み思案の甘え」「受容・承認を求める甘え」「非自立の甘え」「追従の甘え」は、いずれの甘えにおいても高群のほうが「幼少時によく抱っこしてもらっていた」という項目の得点が高くなっている。スキンシップを大事にしてよく抱っこしてもらった子どもは、幼少時から親の愛情や暖かさを充分に感じ取って育ったに違いない。そのようにして成長した青年が、この4つの甘えを強く持っているという関係は、ある意味で頷けるものであるかもしれない。

iv 「小さいときからお父さんのようになりたい、ある

表6．甘え因子と幼少期の養育との関係

甘えの因子名	引っ込み思案		受容・承認		屈折		責任回避		非自立		追従	
甘えの高群・低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
人　　数	147	140	142	145	134	153	170	115	130	156	143	144
小さいころは食事時は全員集合だった												
小さいころから女らしくするよう言われた												
幼少期から自分でできることは自分でするように言われた	高＜低**						高＜低***		高＜低***			
よく抱っこしてもらった	高＞低*		高＞低*						高＞低＋		高＞低*	
子育ての中心は母だった	高＞低***											
子育ての中心は父だった											高＞低＋	
幼少期悪いことをしたらたたかれた							高＞低*		高＞低*		高＞低*	
寝る時に本を読んでもらったり話をしてもらった	高＜低*											
幼少期から自分一人の部屋で寝ていた							高＞低*		高＜低＋			
両親は協力しながら子育てをした	高＜低＋						高＜低*					
お父さんのようになりたかった					高＜低＋		高＜低**					
お母さんのようになりたかった					高＜低*		高＜低*		高＜低*			
幼少期に両親から大切に育てられた	高＜低*		高＞低*						高＞低*			
幼少期にたくましく育てられた	高＜低**								高＜低*			

いはお母さんのようになりたいと思っていた」という得点が高いものは「屈折した甘え」「責任回避の甘え」そして母親のようにという場合は更に、「非自立の甘え」等の得点が低くなっている。幼少時に父親のようになりたいと思っていた者の平均点はかなり低いのであるが、その中でも両親に対する敬愛の念が強い場合はこれらの甘えを減じる働きをしていることがわかる。

ｖ 「幼少時に悪いことをしたら親から叩かれていた」という項目で高得点を示しているものは「責任回避の甘え」「非自立の甘え」「追従の甘え」においていずれも甘え得点高群となっている。

以上概観した他にも、幼少時の親の養育のあり方、あるいはその感じ方が青年の甘えにかなりの関係を持っていることが判明した。今後これらをもっと細かく検討していく予定である。

7．日本人的考え方について

1．将来の暮らし方と甘えとの関係

昭和の初期から総理府で調査が続けられてきたものの一つに、自らの暮らし方の選択がある。

（ア）一懸命働き節約して金持ちになりたい
（イ）小さな事にくよくよせずその日その日を暢気に暮らしたい
（ウ）自分の為だけでなく社会の為になるような事をして暮らしたい
（エ）まじめに勉強・努力して有名になりたい
（オ）お金や名誉のためだけでなく趣味にあった暮らしをしたい
（カ）金持ちでなくても世の中の正しくないことを押しのけて清く正しく暮らしたい。

という６問である。

今回の大学生女子の回答と1991年、2003年の大学生女子の回答の状況を比較したものが表７である。両年とも「趣味に合った暮らしをしたい」と回答するものが最も多く、「その日その日をのんきに暮らしたい」という回答がこれに次いでいる。いずれにしても、これが若者の暮らし方か、と思わざるを得ないのは遺憾である。しかし、今回の結果のほうがその傾向がいくらか少なくなっており、逆に、「一生懸命働き金持ちに」や「自分のためだけでなく社会のためになるように」に対する回答者がそれほど低下していないことはある程度喜ばしいことであろう。

次に「甘え」との関係を見てみよう。それぞれの甘えについて１要因の分散分析をした結果を示したものが表８である。「屈折の甘え」「受容・承認を求める甘え」「非自立の甘え」「追従の甘え」では有意性が検出されている。

「社会のためになるような暮らしをしたい」と回答した学生の数は少ないが、しかし、いずれの甘えも最低、あるいはそれに近いものである。甘えを強く持っていたのでは「自分のことだけでなく社会のために……」という暮らしを選択することは少ないであろう。「自分のことだけでなく」という文言に強く反応しているのであろうか。

更に、「一生懸命働き節約して金持ちになりたい」と回答した者もほとんどの甘え因子の得点が非常に低くなっている。「これも一生懸命働き」というところに甘えの低さが関係したと考えられよう。

これに対して「まじめに勉強・努力して有名になりたい、」と回答した者たちは、人数は少ないのであるが、いずれの甘え因子の得点も最も高くなっている。「金持ちになりたい」という場合は甘え得点が低く、「有名になりたい」という者は甘え得点が高くなっているのは、現代社会を反映した理由によるものであろうか。更なる分析と考察が必要である。

表７．日本人的暮らし方（ns）

	1991年	2003年	2004年
一生懸命働き金持ちに	92(11.5)	20(8.90)	42(14.8)
その日その日をのんきに	214(26.6)	37(16.4)	66(23.3)
社会のためになる暮らし	15(1.9)	32(14.2)	24(8.5)
努力して有名に	28(3.5)	10(4.40)	13(4.6)
趣味に合った暮らし	396(49.2)	106(47.2)	116(41.0)
清く正しく	59(7.4)	20.(8.9)	22(7.8)
計	804	225	283

2．キリギリスに対する蟻の回答

これも同様に昭和初期から調査が続けられているものである。有名なイソップの物語の１節であるが、「夏中歌い続けて働かなかったキリギリスが冬、食べ物に困り、働き続けた蟻のところに食べるものをもらいに来た時の蟻の回答を二つ用意しどちらの回答に近いかを選択させるものである。表９は1991年の調査結果（篠原1991）な

表８．各日本的生き方における甘えの平均点

甘えの因子名	引っ込み思案	受容・承認	屈折	責任回避	非自立	追従
一生懸命働き節約して金持ちになりたい	14.21	17.26	15.74	12.46	16.83	13.33
小さなことにくよくよせずその日その日をのんきに暮らしたい	15.55	18.64	16.70	13.68	18.72	14.62
自分のためだけでなく社会のためになるようなことをして暮らしたい	13.88	18.38	14.29	12.46	16.63	13.92
真面目に勉強・努力して有名になりたい	15.00	21.38	18.77	14.08	19.38	15.77
お金や名誉のためだけでなく趣味に合った暮らしをしたい	14.20	18.18	15.54	13.23	17.44	13.87
金持ちでなくても世の中の正しくないことを押しのけて清く正しく暮らしたい	14.91	19.68	14.95	13.27	17.82	14.77
Ｆ値	1.19	2.60	2.82	1.09	2.64	2.54
有意性	n.s.	P<.05	P<.05	n.s.	P<.05	P<.05

表9．蟻ときりぎりぎりす（*）**

	1991年	2003年	2004年
困るのが当然と追い返す	75(9.8)	34(15.0)	72(25.4)
諭した上で分け与える	729(90.7)	192(85.0)	212(74.6)
計	804	226	284

らびに2003年の結果（篠原・原崎2004）とを示したものである。いずれの年も「働かなかったのは悪いが今度からは働くのですよと諭した上で食べ物を分け与える」と回答したものが「怠けていたのだから困るのは当然と追い返す」という回答をはるかに上回っているのであるが、1991年、2003年そして2004年と確実に「分け与える」という回答が次第にしかも有意に減少していることが明らかである。日本人的価値観として続いていた結果が明らかに変化を遂げ始めていると考えられる。

3．課長のタイプの選択

これもまた総理府が日本人的価値観の一つとして調査し続けた項目である。「仕事の面では少々無理も言うが仕事以外のことでも面倒をよくみてくれる」という『人情課長』と、「仕事の面で無理も言わないが仕事以外のことでは面倒を見てくれない」という『合理課長』のいずれの課長のもとで仕事をしたいと思うかを選択させたものである。

表10．二人の課長（十）

	1991年	2003年	2004年
合理課長	103(12.8)	34(15.1)	51(18.0)
人情課長	729(90.7)	191(84.9)	233(82.0)
計	832	225	284

これも前項の「蟻とキリギリス」の場合と同様1991年、2003年の結果と比較したものが表10である。そもそも日本人の約9割は仕事で少々無理を言われても面倒見の良い課長を人情味が豊かで暖かみのある課長と認識し、そのような課長のもとで働くことを望み、仕事もあまりさせない代わりに個人的面倒も見ない課長を冷たい人間だと感じて避けたがる傾向にあったのである。しかしシンガポール、台湾、中国をはじめとした他の国々では「仕事で無理を言った上に個人的な生活にまで干渉するいやなやつ」である『人情課長』を忌避し、「仕事で無理もさせず個人的生活にも入り込んでこない理想的課長」であると感じ日本で冷たい『合理課長』とされるほうを好む傾向が強いというのが今までの調査結果から明らかにされている（篠原1991他）。今回の課長選択の結果では『蟻とキリギリス』ほど明確ではないが、しかし明らかに次第に日本的考え方が変化している傾向を見ることができる。グローバルな生活を送り始めた大学生（若者）たちの姿の一つであろうか。

【要　　約】

前回までの報告で発表した「経済観念」「生活意識」「愛他行動」「幼少時に親から受けた養育態度」「日本人的価値観」に対する研究を新たな資料により、他の角度から分析を加えた結果、今回も「甘え」との関係が非常に深いことが明らかになった。今回は更に、大学生の欠席願望理由、欠席願望抑制要因との関係を調査して甘えとの関係を検討した。その結果、他の項目と同様甘えとの関係が非常に強いことが判明した。今後、学生の指導法に何らかの示唆が与えられるものと思われる。

【参考文献】

1．李御寧『「縮み」思考の日本人』　学生社　1982
2．加藤諦三『「甘え」の心理』　大和出版　1994
3．北山修『日本臨床心理3「甘え」について考える』星和書店　1999
4．篠原しのぶ『日本青年の生活意識と老人観に関する調査研究（韓国・台湾・タイの比較）』中村学園研究紀要20号　1988
5．篠原しのぶ『日系家行に働く現地従業員の労働意欲とリーダーシップに関する研究Ⅰ（シンガポール・台湾・韓国・日本の調査より）』　中村学園研究紀要23号　1991
6．篠原しのぶ『日本及び中国における青年男女の「甘え」に関する調査研究』福岡女学院大学紀要7号　1997
7．篠原しのぶ・原崎聖子『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅰ』福岡女学院人文学研究所紀要2号　1999
8．篠原しのぶ・原崎聖子『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ』福岡女学院大学紀要人間関係学部編創刊号　2000
9．篠原しのぶ・原崎聖子『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅲ』福岡女学院大学紀要人間関係学部編2号　2001
10．篠原しのぶ・原崎聖子『青年の甘えと社会適応に関する発達心理学的調査研究』福岡女学院大学紀要人間関係学部編3号　2002
11．篠原しのぶ・原崎聖子『青年の甘えと社会的適応に関する発達心理学的研究Ⅱ』福岡女学院大学紀要人間関係学部編4号　2003
12．関文恭・吉田道雄・篠原しのぶ・吉山尚裕・三角恵美子・三隅二不二『働くことの意味に関する国際比較研究（5カ国の大学生の比較）』九州大学医療短期大学紀要　1999
13．統計数理研究所国民性調査委員会『日本人の国民性（第4）』至誠堂　1992
14．土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂　1971
15．土居健郎『「甘え」雑稿』弘文堂　1975
16．土居健郎『「甘え」の周辺』弘文堂　1987
17．原崎聖子・篠原しのぶ『青年の「甘え」に関する調査（高校生から大学生への比較）』中村学園大学研究紀要35号　2003
18．原崎聖子・篠原しのぶ『日本女子大学生の甘えの背景に関する調査研究』福岡女学院大学紀要人間関係学部編5号　2004
19．林知己夫『日本人の心をはかる』朝日新聞社　1998
20．本間友己『中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析』教育心理学研究48　2000

科学研究

本論文は、「民族文化の境界領域に関する文化力学的研究（代表者丸山孝一）の内、分担研究「子どもの文化習得過程におけるしつけの研究」の第3報である。